

3 法隆寺出土古瓦の調査

考古第三調査室は、法隆寺の瓦類について、これまでも発掘調査にかかわる場合のほか、機会を得ては各型式の代表的なものの調査を行ってきた。1985年からは、法隆寺昭和資財帳作成の一環として、寺蔵品、発掘調査による出土品をあわせたすべての瓦類の調査、研究を継続して進めている。昨年度までで、瓦の型式分類や台帳への登録などの基礎的な作業を終えることができ、個々の瓦について調査、研究する準備が整った。今年度以降は、軒丸瓦、次いで軒平瓦と順次調査を進めていく計画で、まず飛鳥時代の軒丸瓦から調査を開始した。調査は軒丸瓦各部の計測、瓦当面にみられる範傷の状態、製作技法、他遺跡との同範関係、拓影、写真撮影など多岐にわたったが、今年度は、平安時代までの軒丸瓦についてその概略を把握するに到った。ここでは、一応のまとまりをみた飛鳥時代から奈良時代までの軒丸瓦について、調査成果の一端を記す。

今回の調査の大きな成果は、従来、瓦当文様から論じられてきた傾向の強い法隆寺の瓦についても、製作技法の面からその時代的変遷をたどることが可能となった点である。まず、瓦範の形は、飛鳥時代には瓦当外縁までのものであったのが、白鳳時代末頃には瓦当側面までかぶるものへと変化した。瓦当部と丸瓦の接合については、丸瓦筒部先端を片柄に作ったり、筒部凹面を斜めに削ったりしていたが、それに加えて、飛鳥時代末頃にはそこに刻み目を入れたり凹凸をつけたりして、丸瓦の固定方法に工夫がみられるようになる。しかし、白鳳時代末期には、この加工が次第に省略され、接合粘土の量を多くする方向へと変化する。また、同じ頃、瓦当裏面の丸瓦を取り付ける位置に、接合しやすいように半円弧状の溝（接合溝）をつけることも行われるようになる。一方、調整手法としては、回転台を用いた回転などでから用いないなどで仕上げに、さらに白鳳時代末頃には、削りを用いる手法へと変化する。このような軒丸瓦の作り方にみられる特徴と変化を捉えることにより、瓦当文様だけでなく、製作技法の面からも他の遺跡から出土した瓦と比較することが可能になる。また、そのことによって、法隆寺の瓦の年代観などの問題も明らかにしうるであろう。

（考古第3調査室）

法隆寺の軒丸瓦(左 飛鳥時代 中 白鳳時代 右 奈良時代)